

貝毒安全対策事業*¹

抄 録

竹内 照文・小久保友義・児玉正昭*²
緒方武比古*²・佐藤 繁*²

目 的

田辺湾をモデル水域にして、*Alexandrium catenella*の出現機構とヒオウギガイの麻痺性貝毒（以下、PSPと略す。）による毒化機構を究明し、毒化の予知手法を解明するものである。

今年度は*A.catenella*の毒含量や海水中の微粒子に含まれる毒量と細菌数を調べ、*A.catenella*とは異なる要因が関与する毒化機構について検討した。

詳細は「平成4年度貝毒安全対策事業報告書」に報告されている。

方 法

田辺湾内ノ浦で2月から7月にかけて、*A.catenella*の発生量、ヒオウギガイのPSP毒量、*A.catenella*の毒含量、海水中微粒子の毒量と細菌数について調査、分析した。

結 果

- 1 *A.catenella*は4月上旬に最大発生量を示したが、ヒオウギガイのPSPは5月上旬にピーク（150MU/g, 中腸腺値）を示し、両者の関係が必ずしも対応しなかった。
- 2 *A.catenella*の天然細胞の毒量を測定したところ、毒量は短期間に激しく変化し、群成長速度が速い時に顕著に低下することが明らかになった。
- 3 20 μ m以上の粒子画分の毒量はヒオウギガイの毒量の変化と一致する傾向が認められた。5.0-20 μ m画分にも高い毒量が認められ、時期によっては20 μ m以上の画分の毒量を上回った。また、0.45-5.0 μ m画分の毒量は調査期間中、低い値で推移した。
- 4 表層水の細菌を分離してその毒生産能を調べたところ、毒生産が示唆される細菌の出現頻度は本画分の毒量の推移と相関する傾向にあった。

* 1 貝毒安全対策事業費による。

* 2 北里大学水産学部